「情報処理学会はなくなるの?」

1993年情報処理学会
全国大会パネル
松岡発表

教授と助手の対話形式
でした。

2002年: 本パネル

- やはり一歩先に行かなくては
- というわけで、本パネルのタイトルは

「20xx年情報処理学会の復活(?)」

です。

※受け狙いの不真面目な部分も多分にありますがご了承ください。

東京工業大学　学術国際情報センタ(GSIC)
および国立情報学研究所(客員)
教授　松岡　聡

2002年3月12日情報処理学会全国大会

TOKYO INSTITUTE OF TECHNOLOGY

GLOBAL SCIENTIFIC INFORMATION AND COMPUTING CENTER

GSIC

Prologue (Prologではない)

- 200X年、会員数の急激な減少に歯止めがかからず、情報処理学会は債務超過状態になり、社団法人格を取り消され、ついに破産・清算された。
- それからY年、ある秘密結社が、情報処理学会の名前を買い取り、その復活を画策して、密かに行動を開始した。その首謀者の真の姿は不明だが、とある大学の有名教授であることは判明しており、YMというコードネームで呼ばれている。
- 我々は、それを阻止すべく、YMとその部下の助手のSMの会話の盗聴テープを入手した。ここにその会話の内容を白日の下に暴露し、彼らの無謀なプランを打ち破る。

- YM:「SM君、とうとうネオ情報学会設立のための秘策を思いついたぞ。」
- SM:「またですか、教授。この前も『新会員全員にIlliacのレプリカミニチュアを配る』なんて。そんな若者にはわからない計算機の昔話を持ち出してどうするんですか。どこかの学会誌じゃあるまいし。」
- YM:「DIPSでも良かったんだぞ。ともかく聞いてくれ。要は昔、情報処理学会が潰れたのは、自らの分野が生み出した世の中の流れに追随できなかったからだ。」
- SM:「そんなのはあたりまえですよ、教授。旧態依然の学会活動なんて、このドッグイヤーの世界ではスロモーすぎます。結局会員になっても何のメリットもなくて、私などいち早く辞めたクチですから。」
- YM:「会費を払わなくて除名されたんだろう? 」
- SM:「だって、いまどきPayPalでオンライン決済できないなんて、信じられませんでしたから。」

- YM:「そこでだ。ネオ情報処理学会はe-ビジネス的オンライントランスアクションで各メンバーのバリューアデッドをアウトソーシングによりポータル化してウェブサービスするのだ。どうだ、良い案だろう。」
- SM:「何を言っているか全然わかりませんが、またニッケーコンピュータの受け売りですね。」
- YM:「つまりだ、今までJOLとかの、フツーのインターネットのサービスプロバイダができないような研究開発面でのサービスを提供するのだ。そうすれば会員になるメリットもあるだろう。」
- SM:「どんなサービスがあるのか、思いつきませんが」
- YM:「例えば電子出版だ。学会の刊行物、特に論文誌を電子化すれば便利だろう。」
- SM:「確かに電子出版は便利ですが、潰れる前ですらWrite Only Journalとか言われていたのに、それを電子化したからどうなるんです?」

- YM:「何を言ってるんだ。研究者は論文をなるべく流布したいだろう。」
- SM:「そうなんですが、本当に流布させたいのは和文論文じゃあなくて、ACMのカンファレンスとかで発表したものじゃないですか。でも一杯あると個人で論文リストとかコンテンツDBとか含めてそれをメンテするのは大変ですよね。幸い、最近私はYahhoの『論文管理ポータルサービス』を使っていて、困ってません。ダウンロードページとかも自動で作るし、どこからダウンロードしたかも一覧が出るし。」
- YM:「そんな他人任せにして良いのか」
- SM:「自動化して他人任せにできるのが良いんですよ。内容をキーワード抽出して、関連論文を見つけてくれるし、要約は作ってくれるし、Sightseerが被引用論文もちゃんとオンラインサーチしてくれて、自分の被引用数もすぐわかるし。いまや情報分野に限らず、常識ですね」

- YM:「でも論文は書かなきゃならんだろう。」
- SM:「教授は自然言語処理の進歩をフォローしてないんですか? Goolugの「翻訳・作文」サービスを使えば、アイデアをメイルで投げたり、Web pageにまとめておいたりすると、あとは適当に文章を補完して論文にまとめてくれるんですよ。英訳も結構自動的にうまくおこなってくれるし。」
- YM:「ううむ、教授の商売あがったりだな。でも研究会とか、シンポジウムとか、全国大会とかがあるだろう。」
- SM:「研究会自身、旧態依然のテーマを脈々と行って竪穴をひたすら掘って、世の中の動きに取り残されたのが多かったですからね。しかも、今やふららの仮想ミーティングタウンで、ネット上で研究会の運営は簡単にできるし、実際のミーティングもAccess Gridとかで皆自分のオフィスや家からできるし。私もそのおかげで海外出張の数が年18回から半分に減りましたよ。」
- (話者注: 最後は半分本当です。＼ (^o<)／)

- YM:「ううむ、じゃあネオ情報処理学会の目玉のサービスは、研究成果の迅速な発表かな。情報処理技術を駆使して、論文誌の査読の迅速な処理をして、いち早く刊行するとか」
- SM:「まだ論文誌ですか。昇進以外に役立つんですか。それより、もっと会員の研究成果を個々にアピールするのを手助けしてくれればよかったんですけどね。例えば、負荷が高い個人の研究成果のHPを作って維持するのに手助けしてくれるわけでもないし、情報発信を手伝ってくれるわけでもないし、学会に個人がHPやメイルアドレスを持てるわけではなかったし。やはり会費や労力に見合った、情報技術を駆使したサービスがないと魅力なかったですよね。情報収集はWebで十分できるし。」
- YM:「若僧が。学会は研究論文を発表する場だ! 偉そうな口を。。。おっ、どうした。背中から煙が出てるぞ！」

- SM:「ネオじょうほうがっか。。。きくけこぁが。。。」
- SMは火を噴いて動かなくなった。驚くYM。
- YM:「こっ、これは」
- 突然ドアが開いて、(本物の)SMが入ってきた。
- SM:「あーまた壊れちゃいましたね。これだからZONYの初期ロットはだめだな。」
- YM:「おお、これは君のアンドロイドなのか」
- SM:「そうです。最新のですよーご存知ないですか。くだらない会議とか、講演とか、教授の相手とか、いろいろ用途があります。ヒューマノイド型ロボットと人工知能の研究の賜物ですよ。おかげで研究が進むこと。でも情報処理学会ではあまり盛り上がらなかったですねえ。」
- YM:「よし、このアンドロイドを10体発注しよう。これで私はできた時間でネオ情報処理学会設立に奔走できる」
- SM:「ゲーやめてください教授。ご乱心を!!!」

まとめ

- 情報技術は、インターネットだのモバイルだのグリッドだの人型ロボットだのxxxインフォマティックスだの、研究・社会面で新たな変革を生み出している。
- (今回はアイデアが貧困だったが) 学会のサービスのありかたも、むしろ情報技術の先導的役割として捉えるべき。
- 情報はもうWebでどんどん入る。学会の情報伝達の役目は終わった。
- 国内の論文や研究活動だけでなく、会員個人が日本から世界や産業界にどうアピールするか、というのを手助けするのが本来のミッションでは。
- なお、この物語はフィクションです。